

報告④

朝鮮三国の山城と鞠智城

講演者紹介

田中 俊明（たなか としあき）

滋賀県立大学 名誉教授。専門は朝鮮古代史、古代日朝関係史。
京都大学大学院文学研究科博士課程修了。堺女子短期大学講師、
助教授、滋賀県立大学教授を歴任して現職。

朝鮮三国の山城と鞠智城

滋賀県立大学 名誉教授 田中 俊明

はじめに

こんにちは。田中俊明です。最初にこう君に切り捨てられまして、そのあと名前も間違えられまして、何かもうヨタヨタのところから出発です。まあ、最後なので、ちよつとくらい延びてもいいのかな、とか思っています。

私の発表では、写真をたくさん見てもらおうと思っています。

朝鮮三国というのは、高句麗、百濟、新羅の三国を言うのですが、それぞれ特徴がありまして、違いがあります。日本の古代山城を基本的には百濟の技術だと言っていますが、今の亀田さんの話でも、それ以外の高句麗の要素、新羅の要素とか入っているということでした。とりあえずその三国の山城がどうかということを見ていただこうと思います。



中原地域 (図1)

その三国の前に、高句麗と関わりがある夫余という國が中国の東北地方にありました。中国文化、漢文化の影響を強く受けているところです。

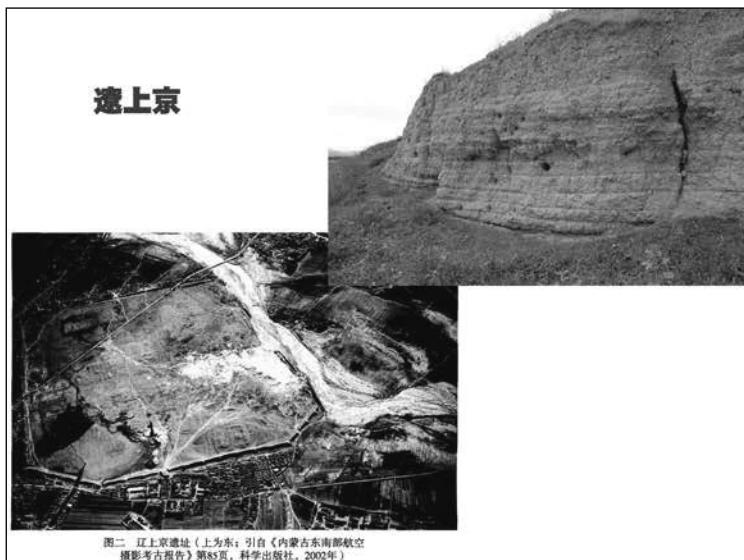
その前に、さらに前の中国の中原地域における土城について見ておきます。これは版築で造られている土城で、例えば商城というのは殷王朝の城のことですが、紀元前の二千年期にまで遡るという土築の城がありまして、これは同じ質、粘着性のある黄土を使って同じ土を積み上げていく版築、中国中原地域の基本はそういうふうな版築になります。これが鄭州商城で他にもすぐ近くの偃師商城など河南省が中心なのです。が、そういう城壁の中の宮殿の跡とかの写真です。

中国東北 (図2)

中国の東北にいきますと、同じ質の土を積み上げても固まつていかないので、粘質土、粘着性のある土を



図 1



図二 辽上京遺址（上为系：引自《内蒙古东南部航空
摄影考古报告》第85頁。科学出版社。2002年）

図2

交互に挟んでいくという版築です。ですから、中原地域のいわゆる版築とは違う。夯土と言っている版築とは違うということです。そして、朝鮮半島の版築もそういう版築になります。今一つ取り上げるのは、ずっと後の遼の時代の都。上京を、よく残っている上京の発掘の時ですけれども、その断面見るとこういう形で、この穴が棍眼こんがんと言っているものです、横に渡す木の板の痕跡が、あるいは中に棍そのものが残っていたりもしますけれども、こういうふうに版築している。これも同じ質ではなくて異質の、粘質土などを挟んで積み上げていく、そういう版築です。

一 夫余

夫余ですが、夫余の地域は高句麗より北側の地域になります。吉林省の東側です。

東団山城（図3）

そこには、土築の城、都の城として東団山城というのがあります。吉林市の北流する松花江を挟んだ東側ですが、城壁を三重ぐらいに巡らしている城です。文献的には「魏志」夫余伝に円形の城柵として出てくるものです。これは龍潭山城から見た東団山城です。夫余の中心地はこの辺ということになります。対岸は吉林市街です。こうした独立丘陵になっています。この辺に宮殿遺構があつたと考えられているところであります。文化財指定になつておりますので標石がある。これが城壁です。これが三重ぐらい巡つてあるといふうな形の土塁です。この東団山城は、城内がそれほど広くはなくて、居住性があるといふうには言えないのです。これは発掘の時の写真を博物館で撮つたものです。



図3

九台県の山城 (図4)

夫余の他の山城ですが、夫余の地方に行くと先ほど言つた円形の城柵というのが幾つもありまして、例えばこれ吉林省の九台県というところですが、そこに幾つもの山城が知られております。簡単な図ですが、城壁があつて真ん中に円形の土壙があるのです。これは住居跡であると考えることができます。つまり居住性があるということです。ここに人達が住んでいたということです。高句麗麾下の山城はほとんど居住性がありません。住むところではないです。戦争が長引いて立て籠もあるということが長引くということはあります。が、本来的に居住するための城ではないということです。これが九台県の土壙です。中にこうした穴があり、発掘していないので、はつきりわかりませんが住居跡とみられる。



図4

二 高句麗の山城 (図5)

そうした夫余とは違いまして、高句麗の山城は基本的には居住性がない城として造ります。それから高句麗の城に限らず、周長が二キロを超えると大型山城というふうな言い方をするのですが、その二キロ以上の山城は沢山あるというのが特徴といえるかと思います。高句麗の地域は、この遼河よりも東側の地域で山があるところになります。ですから、山城が基本ということがあります。先ほど言いましたように居住性はなくて、基本的に麓に住んで、一旦緩急あれば中に逃げ込んで、という性格を持つてているということです。

五女山城



図5



図 6

仁という町です。その桓仁の町のさらに北側に、発祥の地とされる象徴的な山城があります。それを五女山城と呼んでいます。この五女山城は発掘を経て、世界文化遺産に指定されました。石築の城壁が東側にだけ造られています。高句麗の発祥というのは紀元前の一世纪、『三国史記』という記録によると紀元前三十七年なのですが、実際にはもう少し早まると考えられます。五女山城がそういう発祥の時代というか、初期の都の中心であると言えます。城壁はその時代からのものではない。住んではいても城壁を作ったのは後だ、というふうに考えるべきだと思います。（図 6）

これは霸王朝山城という集安の北の方の山城から見た五女山城です。目立つ山なので遠くから見えるのです。これは霸王朝山城です。位置関係は、こういうふうに集安があつて、北の方に霸王朝山城、その西側

に五女山城。今、ダム湖ができまして、ダムでこの辺は水没してしまったところですが、高句麗の中心地はむしろこちらの方と考える必要があります。ここに方形の石築の喇哈城らはがあります。もうダムで水没してしまいましたので普段見ることはできませんが、高句麗の最初の時期の都の中心はこちら側です。その西側の山の上に城を築くという形で広開土王碑文に書かれています。その五女山城は、頂上部は平坦なのですがそこから百メートルぐらい下がったところに石築の城壁を造っている。こちら側にだけです。ただ登り口には少し石墨を造っているところはあります。こういう特異な山なのであちこちから見て良く分かる。西側入ったところにある石墨部分です。今のすぐ横のところ、もう一ちら側はすぐこの辺りまでしか城壁を造っていません。頂上部から百メートル下がったところにある、東側の城壁の東門の付近です。これは整備し直す前の状況です。最初、一九九三年にこの辺りへ行きました。集安はもつと早くから行っているのですが、桓仁に行つて見ることができると考えられたのが一九九二年のことでした。平壤に行つた帰りなのですが、その翌年の一九九三年から毎年この地域に行つております。高句麗は、中国の漢の武帝の時代に樂浪郡より一年遅れで置かれた玄菟郡がありまして、その中の県城がこの地域にも置かれました。高句麗は、その中国の勢力の圧力の中から、それに抵抗する形でスタートするのです。最初に中国側が置いた県城を奪い取ります。奪い取つてそれを使いながら近くに山城を造る、というようなパターンです。それが高句麗の中国支配を受けた地域のあちこちで見ることができます。これが本来の玄菟郡の県城の一つです。

丸都山城（図7）

そのあと中期の都、集安に移ります。先ほど、五女山城という山城があつて、麓には喇哈城という城が東側にあると言いました。基本的に、山城と麓の居城、この組み合わせ。これが都のあり方です。後期の前半まではそういうやり方をします。中期の都は、北朝鮮との国境でもある鴨緑江に面した集安、ここに山城とそれから麓の城があります。これが、中国で丸都山城という言い方をしますが、山城子山城です。城壁が六キロ余りあります。城壁が下まで降りてくるという形の城になります。これが遠景です。全体が城壁です。整備された南門です。通路はここ二か所あるのです。こういう整備を経て世界文化遺産になりました。世界文化遺産指定の後もいろいろ造つておりましたので、ちょっと問題があるというふうに思います。これ造つているところです。もう世界文化遺産に指定された後なので、けれど、積み直しているのです。そこから見た下にある、山城下の古墳。これ北側の城壁です。これはもともと、残りのいい部分。その北の城壁から見た集安全体です。鴨緑江がこれで、これ北朝鮮側。

国内城（図8）

麓の城は、昔は通溝城と言つていて、今は国内城という言葉をしています。しかし、国内城というのは都のことなので、その中の一つの城について言つるのは正しくはないのであまり使うべきではないと思います。この平地の城も、本来は玄菟郡の県城であつたと考えられるものです。この北側の城壁は、昔から良く残っているところです。西側は、この辺全部立ち退きになりました。以前は住宅密集地で家

**山城子山城南門
(中国では丸都山城)**



山城子山城北壁

図 7

通溝城西壁



**集安・通溝城北壁
(中国では国内城)**



図 8

の中を訪ねて後ろにある城壁を見せてもらうということをしていましたが、これも二〇〇四年の世界文化遺産指定に向けてこの辺全部立ち退きとなり、全体がよく見えるように整備されています。

平壤の城(四九)

高句麗の都は、そのあと平壤に移ります。平壤は、前半と後半と、二つの時期に分けることができます。前半は、大城山城という山城があつて、その南門からずっと真っすぐ行つたところに清岩里土城があります。これは先ほどから言つております山城と麓の城のセットです。後半になると、現在の平壤市街地の中心部に移ります。平壤前半の大城山城について。北朝鮮ではその麓にある安鶴宮跡が当時の宮殿だというようになりますが、それはおかしい。安鶴宮跡は、た城壁です。南壁は、ほとんどこのように壊れた状態



です。城の真ん中に革命烈士の墓というのがありますて、そこから見た城内です。城壁がぐるりと周りを囲んでいる形になり、これは南門入ったところで、なかに遊園地があります。これが復元された南門です。実際の城壁は、この辺を走っています。先ほどの革命烈士の墓から見た市街地です。メーデー競技場があり、陵羅島がある。これが清岩里土城です。一際高いのは金日成総合大学です。反対に、先ほど見た朱雀峰というのはここになり、これが大城山城です。この陵羅島から見た清岩里土城がその対岸です。ただそこには行くことはできません。この島までは行けるのですが、なぜ行けないかというと、ここに金日成主席が住んでいたからで、その聖地です。近づくことも危なかつたのですけども、とりあえず競技場まで行つてきました。中洲がこうあつて、対岸が清岩里土城です。ここに錦繡山議事堂と言つてゐる金日成と金正日の遺体の安置所があります。これは大同江の東側にある、主体塔というタワーで、そこから見た対岸が金日成広場です。そのちょっと北側に牡丹峰という小さい丘陵があります。これが高句麗最後の都の北域にあたります。平壌の後半は、これ全体が都になります。そのうちの北の部分がこの牡丹峰の少し高いところになります。この一角です。先ほどの陵羅島、清岩里土城はこちらです。牡丹峰に近づいたところです。王宮があつたと考へられるのは内城、こちらは外城ということがあります。外城の城壁が、今は全ではありませんが、この川に沿つて外城の城壁が造られています。今は堤防があります。これは内城の北門、七星門という門ですね。それから端にある乙密台という角楼です。この辺の積み方が階段式で少し隅丸になつてゐるというのを、もう少し、ちゃんと持つてくれ

ばよかつたのですけども、ざつと見ていただくために選びました。これは外城の土壘で、整備しています。

鳳凰山山城 (図10)

高句麗の山城は、特に隋・唐に攻撃を受けたため記録が残り、その記録のおかげで当時の名前がよく分かる、というが多いです。大型山城が多いというのも特徴です。最大の城がこの烏骨城という、現在の鳳凰山山城と呼んでいる城です。当時の烏骨城、これが遼東半島最大の城です。周長が十五、十六キロぐらいあります。遠景がこれです。こちら側の山と向こう側の山と両方で、城壁を造っている。これはたまたま平壌に行つた帰りに、上を通りました。こちら側の山とそれから北側の門がここにあるのですが、二つの山を連ねて造っている巨大な山城です。今、見ていた通路がこちらから容易に入ることはできるのです。これは模型です。城内少し入つたところ。この両側の山、その



図10

稜線全部に造っているわけではないのです。それから、川で流されてしまった今の入口のところ、この辺は下から積み上げています。両方の山をつなぐ形で下の方にこういう石壁を造っているということです。上方行くとこういうところでも城壁を造っているのです。全部という訳ではありませんが造れるところ、かなり城壁を造っていることができます。これが最大の城です。これは北側の門です。門礎の石もここにあります。ちょっと記録に出てくるのを書いておきます。極要の地です。

燕州城

(図11)

他の高句麗山城もちょっと見ていただきます。燕州城と現在呼んでいますが、高句麗時代の白巖城という城にあたるのが、現在の燕州城です。太子河という川に面しています。石築山城の例として紹介します。太子河の少し下流の方から城壁が見える。こつちはあま

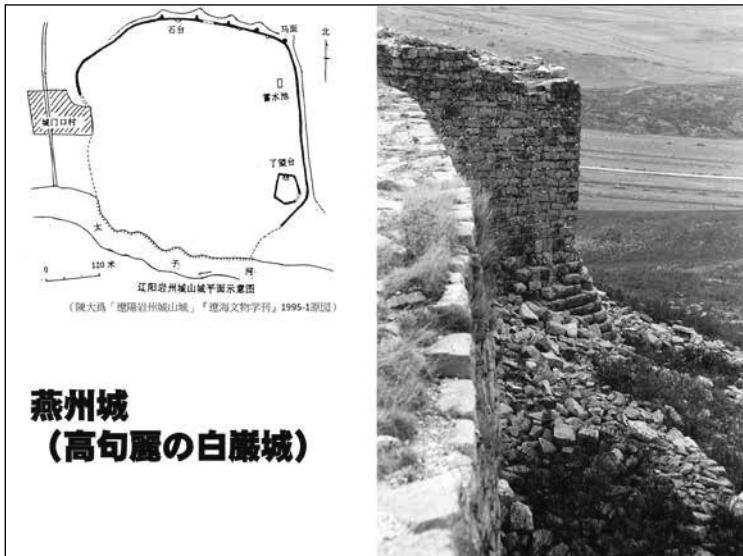


図11

り造つていないので。全体が、中が見えてしまいうな山城なのです。そして大きな雉が、ここに六つぐらい数えることができる。これは城門が近年、遼寧省の文物考古研究所によつて発掘されていまして、門の内外を通す暗渠が走つています。これは高句麗ではなくて、少し後の遼とか金が山城を使うことがあります。その時の構築物ではないか、というふうに考えられるものです。これは新たに見つかつてゐる雉です。城壁の北側で、このような形で緩やかなところに雉を造つてゐるのです。これ城内の東南の端からです。雉が造られたのは向こう側の斜面です。先ほどの門の調査はこちらの部分です。これは太子河の上流側です。

石築の山城

(図12)

さらに他の石築山城として、大連にある大黒山城をあげます。文献に出てくる卑沙城という城にあつてられる城です。これは飛行機の上からです。これが全体

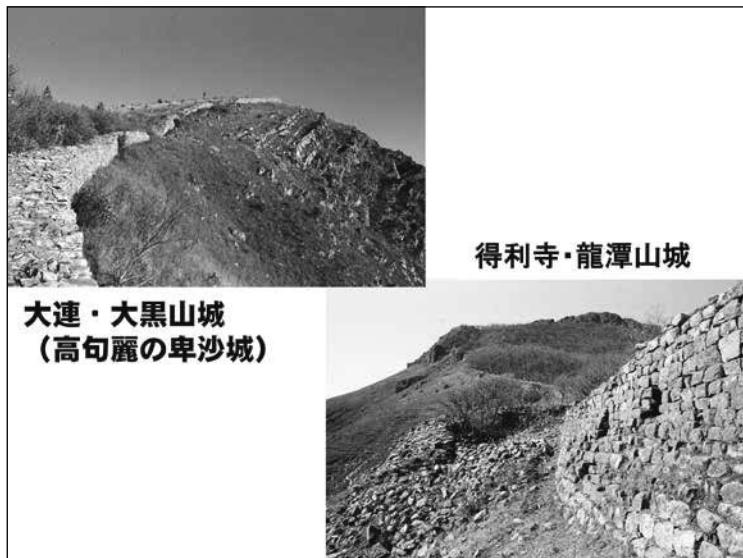


図12

で、これが城壁です。こういう石築の城壁がよく残っている。これは庄河にある石城山城です。門です。当時の名前はわかりません。上にある望楼です。それから得利寺というところにある龍潭山城。石築の城で、これが甕城です。飛び出している。こういうように入ります。これは瀋陽のすぐ北にある石台子山城。発掘されたことがあります。これは大連に近い吳姑山城です。これ柳河という少し離れたところにある羅通山城。最後は平壌のすぐ近くにある黃龍山城です。

土築の山城

(図13)

次に土城の例を見ていきますと、最も有名なのは安市城です。唐の太宗が自らやってきて、結局攻め落とすことができなかつた城が安市城なのですが、それは土築の城です。難攻不落で結局落ちなかつた城ですが、土築と石築どちらが難攻不落かというと、どちらも難攻不落です。山城は基本的には簡単に落ちないで



図13

す。高句麗山城でも落ちた記録が沢山あるのですけどそれは、内応者がいるという場合です。これが英城子山城で安市城にあてられている土築の城です。ここが下から入る部分です。門のあたりは下から積み上げてある土壁です。あとはこの、稜線ずっと土壁です。そのような全体土築の城の例としていくつか見ていきます。城門のところとかいくらか石築がなされているといふ、撫順にある高爾山城は、一九四四年に高句麗山城で一番早く発掘調査がされ、そのあとも中国によつて発掘された城です。高句麗の城の部分は、この真ん中に残つてゐる土壁です。あとは稜線を土壁が走つています。ここに門があつて、そこを戦前に三上次男先生が発掘された。この図面がその当時の図面で、この箇所にあたります。（図14） 東門のところ、この辺は石築をしている。それからもう一つ、建安城という文献に出てくる城にあたるのが高麗城子山城です。遼



図14

東半島の蓋州というところにあります。これがやはり下から積み上げた土壘です。城壁は、稜線上を走つていくのですが、その土壘、積み上げた部分が版築の土壘です。これ版築した当時の木材が残っているのを見ることができます。城壁が向こうから伸びて来て、ここで門ができる。この門のあるところで勝手に土取りをしていましたが、同行した研究者に直ぐ伝えたので、土取りはもう中断していると思います。石築の部分もあるところです。これは発掘された箇所です。他の城の例としていくつか見てきました。

三 百濟の山城

(図15)

次に、百濟の城を具体的に見ていくと、百濟は民族系統的に高句麗の同系だとか言われますが、実質的にはあまり関係がありません。百濟山城は基本的に土築の城です。それから城壁前面の列石、日本の古代

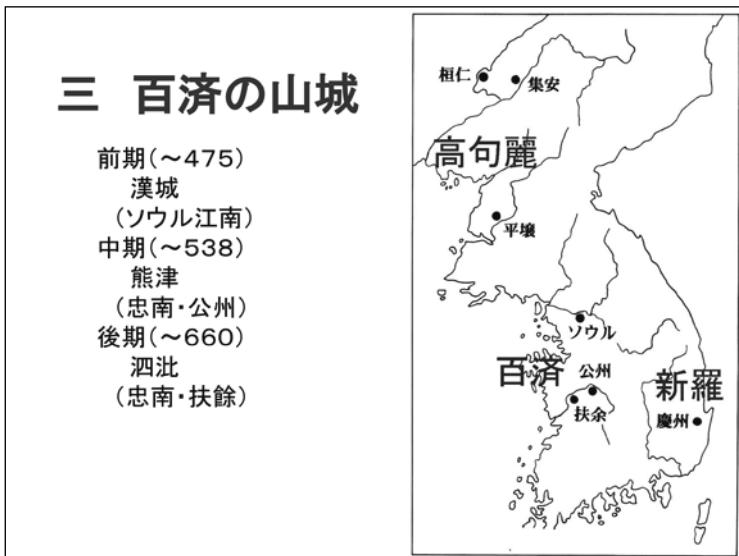


図15

山城の列石のようなもの、あるいは柱穴があるという例が見られます。

風納土城（図16）

これは都の城ですが夢村土城と風納土城、これが王城であり都の中心です。これが風納土城で、ここに王宮があつたとみられます。王宮の探索は続けられているのですが、現在この辺りが発掘調査されています。城壁は断面で幅四十メートルぐらいです。高さが十メートルぐらいあります。これ一九九九年の時の断面調査の時の写真です。この時は、遺物が出なかつたので年代が分からなかつたのですが、その後の調査、漢城百濟博物館の展示のために断面調査をして、断面を剥ぎ取つて展示をしています。その時に中から遺物が出ました。大体四世紀の後半ぐらい、もう少し遡るようみるとあるという年代です。これが展示している風景です。

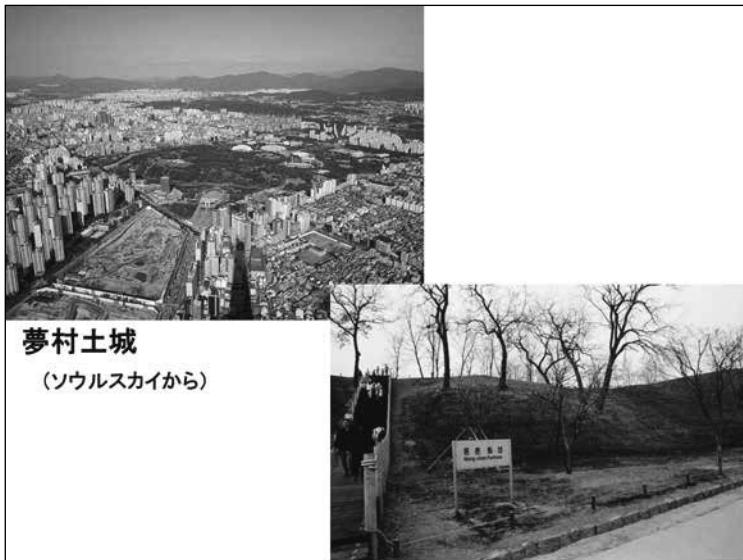
夢村土城（図17）

そのあとに移つたのはこの夢村土城です。風納土城のすぐ東南です。ここはオリンピック公園になっています。オリンピックが始まる前に調査が始まつて、百濟の土城が残つてているということで、元々選手村の予定だつたのですがそれを止めて公園化しました。今は整備されてよい公園になつています。昔はこういう木柵があつたと考えていましたが、現在は別途柵を作つて補強するというものではないということが分かりましたので、この考えは捨てています。現在発掘しているのはこの北門の内外です。外側の調査が終わり、北門の内側の調査が今続いています。



風納土城(漢城百濟博物館展示)

図16



夢村土城
(ソウルスカイから)

図17

公山城 (図18)

百濟の場合も、中期、後期と都が移ります。中期の都は公州にありその中心が公山城です。これが全体で、こちらが一九七〇年代に整備された城壁です。城内には、推定王宮址があります。城内の下の部分、川に近いところの部分も発掘調査をしました。五、六メートル下げるとい遺構面に達しないのですが、そこを王宮と捉える考え方もあります。図を入れていますので見ていただくことにしましょう。それから、これは東の方に土城部分が残つてあるところです。

扶蘇山城 (図19)

最後の都が泗沘、扶蘇山城です。こちらも現在発掘が続いています。これ土墨部分です。扶蘇山城に加えて、羅城と呼んでいる城壁が、この東側に、さらに南側に伸びてきます。以前は西側にもあつたと見られていていたのですが、現在は西側には造られていなかつたという考え方になつていています。この図は昔の考え方ですね。これは北側の羅城調査の時の、扶蘇山から伸びるところの城壁になります。そこから伸びたところも復元整備しています。ここに雉があります。扶蘇山城から東に伸び、以前に青山城とされていたところで南に折れる。ここまでが北羅城です。そして、山を越えて陵山里寺址や陵山里古墳群の西側を通り、さらに山を越えて錦江河口近くまで続く。これを東羅城と呼んでいます。(図20)これは東羅城の発掘の写真です。この城壁の外側に石築、これ石を何段か貼り付けています。ここでは芯が土墨で外側に何段か積み上げる形の石築を造つてあるということです。これは羅城の外側に水が



図18



図19

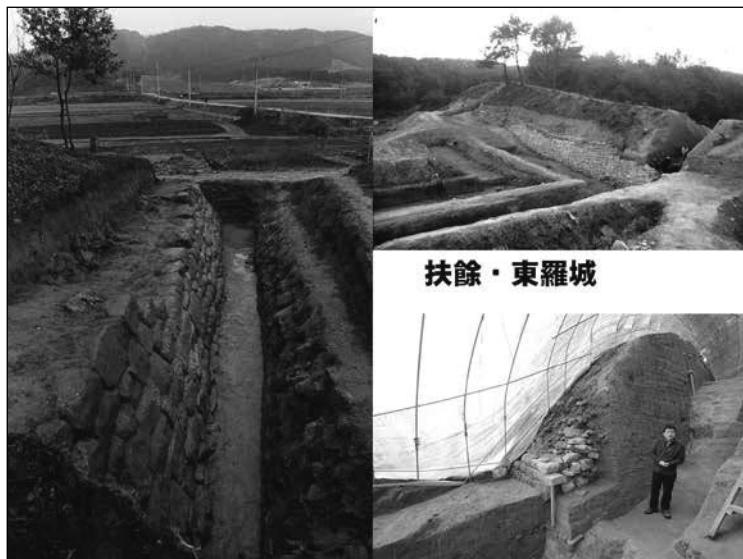


図20

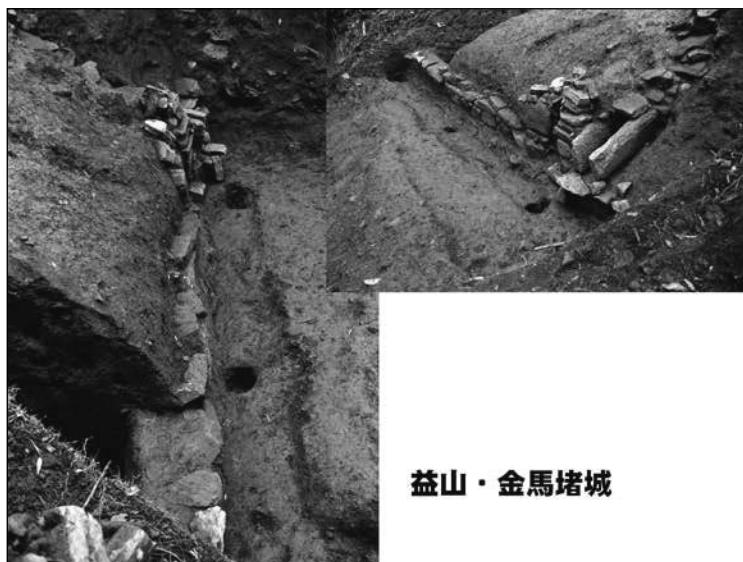


図21

あつたという、水城のような推定復元図です。

百濟山城の基本形 （図21）

これは全羅北道の益山の金馬堵土城です。これが「都土城」などと間違った言い方をされたりしますが、これがちょうど、版築土壘と列石があり、その前面に柱穴があり、排水の枠遺構もあります。

四 新羅の山城

新羅は、現在の慶州盆地に発祥し、滅亡の九三五年まで、一度も中心地を遷すことはありませんでした。

月城 （図22）

新羅の王宮は、基本的に月城にありました。月城の調査は、二〇〇七年にレーダー探索（物理探索）によつておよその遺構配置が把握され、そのあと二〇一四年から城内の発掘が始まり、現在に至っています。城内の西南の端の方では城壁断面が調査されて



図22



図23

います。これは城内建物です。これが王宮だと言えるようなどころまで調査が進むよう期待します。これが西南の土壘の調査です。この調査によつて土壘が下から積み上げていることがわかりました。これは月精橋のすぐ内側の土壘部分ですが、整然とした版築という感じではないものの、下から積み上げている、ということが確認されたところです。

新羅の典型的な山城 (図23)

あとは、すぐ近くにある明活山城。ここも、北門のところが調査されていまして、これが門道です。それから忠北報恩郡の三年山城、これは整備し直したものですが裏の方に行くと元の城壁が残っています。

五 朝鮮三国の山城と鞠智城

以上、朝鮮三国、高句麗と百濟と新羅の山城を、

ちょっと駆け足で見ていただきました。高句麗の山城は大型のものが多いし、石築も土築も両方あるのですけれども、隋・唐に攻められたおかげで文献によく出てきますし、記録に残っている資料、名前が残っている資料が多くあります。百濟の場合は、土築の城、土城が多くて規模も小さいです。新羅の場合は、規模的に大きいものもありますが、先ほど見ていただいた月城、都の中心なのですが土築の城です。つまり両方あるわけです。（図24）

ということで、鞠智城を考える時の比較の材料にしていただければ、と思い見ていただきました。これで終わります。



図24